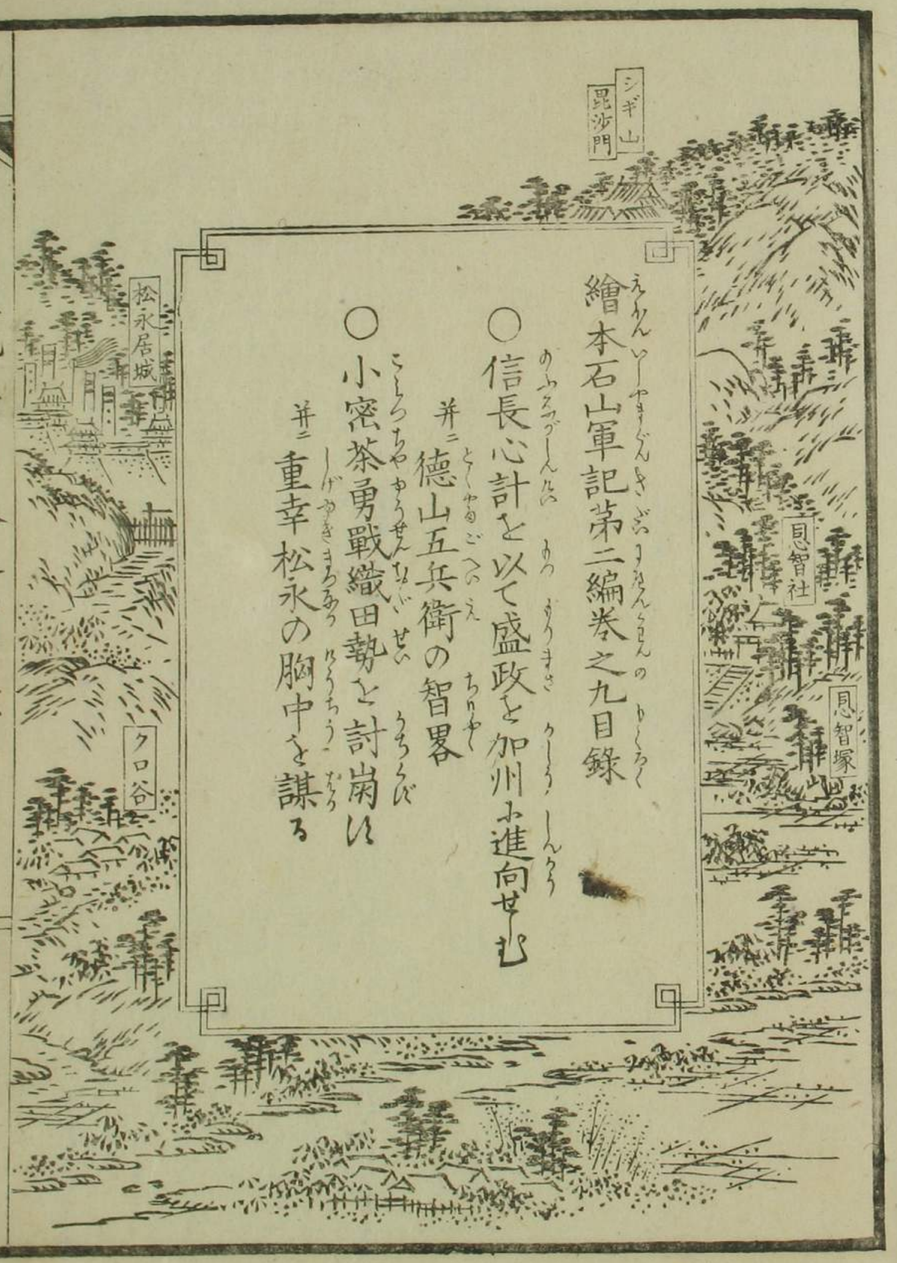
土屋正義編輯

往古石山軍記

第二編

九

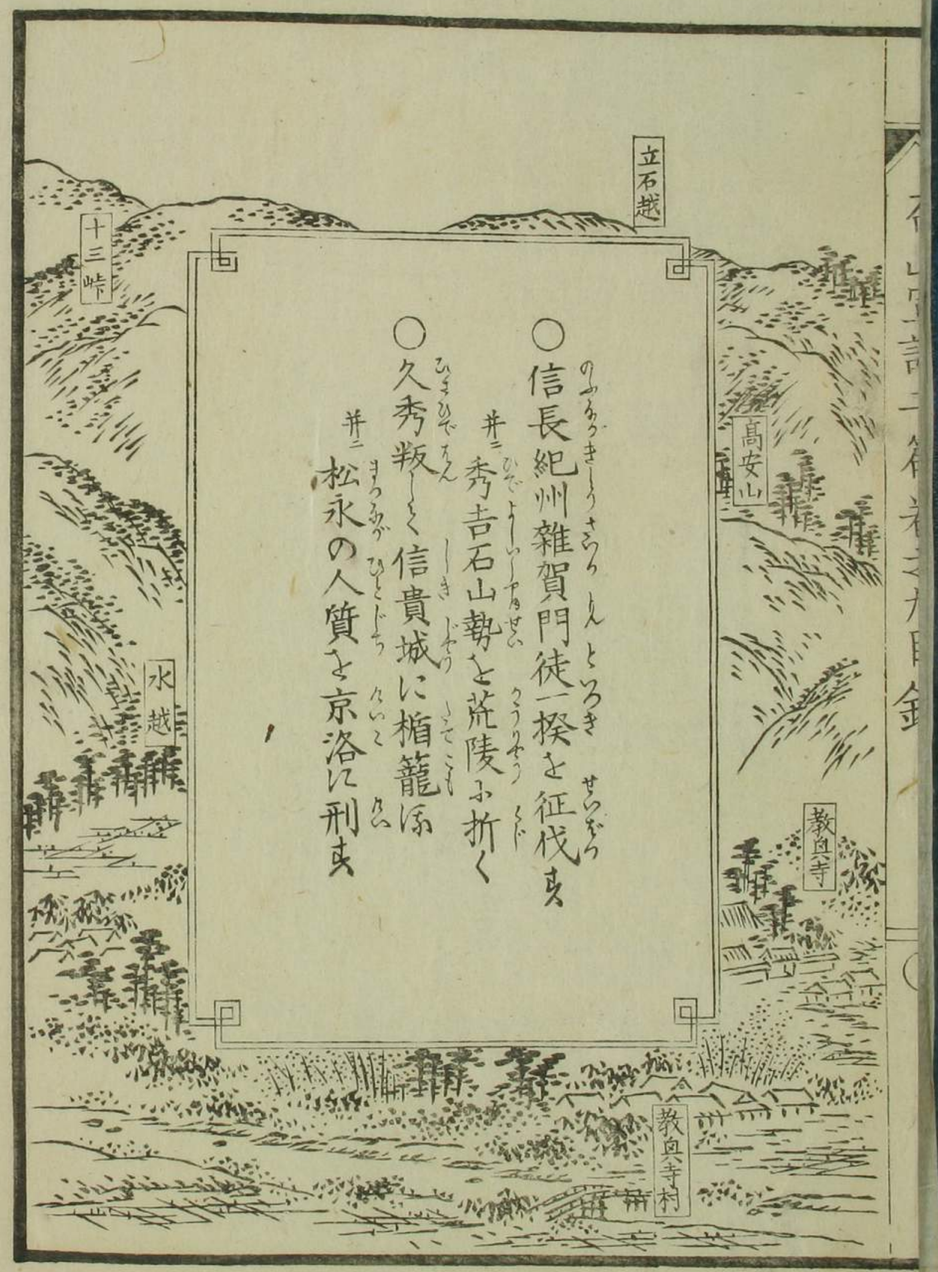
特
へ遠14
2269
19



繪本石山軍記第二編巻之九目録

○信長心計を以て盛政を加州へ進向せし
并ニ徳山五兵衛の智畧
○小密茶勇戰織田勢を討崩し
并ニ重幸松永の胸中を謀る

遠14
22859
19



○信長紀州雑賀門徒一揆を征伐す
　并に秀吉石山勢を荒陵に折く
○久秀叛く信貴城に楯籠ふ
　并に松永の人質を京洛に刑す

續本石山軍記第二編卷之九

土屋正義　編輯

○信長心計を以て盛政を加州に進向さしむ并び徳山五兵衛の知略加州大聖寺城主戸次右近難戰加勢を乞ふ縡頻りなれば信長佐久間盛政に命ぜられ亦柴田勝家に兵合併せしめ加賀能登越中のもとでも手柄次第に討取べしとて宏活大慮の御錠なれば勝家盛政大きに歡び双方勢を一手として進發し戸次右近に代らしめ給ひ此時一揆們い諸處に城を構へ勢ひ猛く震ひ怒ると柴田佐久間の兩將は大聖寺より西方に當れる菅天神山の城を押寄四方八面より把圍し晝夜を分ちず二日二夜揉に揉で攻詰られば一揆防ぎ支ゆる力竭城を棄てを

ち行処と逃もまじと追縋つて直ちに居振橋の城へ把懸り息とも繼せぞ
揉ぎる城中の一揆い茲ぞ破られじと矢玉を飛し大木大石を投懸嚴
しく防ぎ戰ふ程に寄手の兵卒的と成て痍を蒙むるもの甚だ多し時
に佐久間玄番允が先鋒の將に徳山五兵衛尉一宗と云ふ軍車に馴る
知謀の士なり盛政が前に来つて言ける様城中の一揆必死と極め防戰
それが味方死傷の者勘くずか攻にもとも急に落城覺束なし甚
五百餘人の兵を他所へ引分南無阿弥陀佛の旗を押立石山の門徒
加勢の体に看せ味方の勢の後より打て懸り虚計て同士軍と做
元來軍法を悟らぬ一揆ども實ふ味方の援兵也と心得城中より切
て出るい必定へ介時外ふ伏兵と置て引違ふて城を乗取い唯一舉に

功と爲もべしと云ふ盛政之と聽て一存にも能ぞ即ち伯父勝家を請
じて徳山が計略を問れば勝家掌を拍て感心し此謀策極めて妙
案へ先つ年信長公野田福島引拂ひ江州宇佐山え御陣の時もれ
澱一口に埋伏しる本願寺勢と打崩し奪ひ取たる旗指物笠印袖
印要に立鳥も有ゑりと今に所持して准備ふせり徳山五兵衛い
彼旗と押立形の如く計略行ふべし俺又別に謀計を構へ當城を乗
取手段ありと云ふ是に於て軍議評決し五兵衛い其夜手勢を引具
し御幸塚の邊に忍び窺ふ翌朝未ぞ東雲の刻よりして勝家盛政
兵と合勢して城の正面に對陣を居て坤軸も動ぐ計りに鬨を作り
鳥銃と擊懸火矢と飛し被ぎ連てぞ責うけゐ城中の一揆們爰を

専途に同く矢石を打懸防ぎ戦ひ午の尅まで攻合けるが這時寄手の後よりして南無阿弥陀佛の白旗一流颯と押立て佐久間勢ハ皆を無二無三に斬立入れば寄手の兩兵大きに乱れ噪ぎ軍勢を兩段に分隊ー挑ミ戦ふ依之城の攻口大きに緩み引色立て省へにる城中の一揆們是と省て驚破こそ同志の門徒の輩黨を結びて後詰すぞ此方よりも疾々切て出で差挟んで打崩せよとて林七助内山四郎左エ門の兩個一揆の中の魁なりしが自ち逞兵七百餘人を引卒し城門をひらきて驀直に突立進み入ば寄手支え戦ハんとも不ず右往左往に敗走すれば勝に乗る城兵們ハ謀畧とハ夢にも知らず一町計り追捲りつ四方と岐と省廻しけるが是ハ如何六字名号の旗も省へぞ援兵と思し

門徒勢ハ他地え去しや影ぞに省へず柴田佐久間が大軍の勢ハ盛りに転して八方より取圍み鳥銃の筒先を揃えて陣を列ぬ巻寄たり林内山の兩個大きに驚き南無三敵の罠に懸りたるぞ一方ハ破り城中へ引取やと馬の頭を立直しつ我先にと駈ちりと候設る寄手の軍勢矢丸と飛もちと雨より繁く脳を漂ふ一揆們を前後左右より引包み斬立突伏戦ふ程に討るー一揆們麻を乱す如く林内山の兩人も斬立られ防き兼て數箇所の疵を負辛ふぞて一方を斬開き討残されー軍兵と僅に百騎計り引卒へて城際ぞ遁れ帰りるに思ひもよらぬ城内より弓鳥銃を破乱々々と撃出一個の兵士櫓上に現れ出城外の一揆に呼ひるハ柴田修理進勝家

の郎等毛受勝助家照主人の命せと蒙りて疾より汝等を侯縡久し先留主の馳走二ツ玉と草臥休めに試みとして言ふ早らず噇と撃ち出し前に進み林七助が響に應じて馬上に得忍び真逆さまにぞ落ちる内山之に肝を潰し後れを生じて亦引返し的ゑく逃んと仕けれども寄手の大軍四方と囲ミ雲霞の如くに追來れば進退如何ともなすべきようもなく馬より下りて竟に降参と勝家盛政凱歌を揚げ城に火を懸焼亡ふさゝめ直ちに兵卒を従へて松任の城を攻落し猛威破竹の如くなれば尾山は砦に楯籠りる門徒の一揆勢も城を棄て散々に落行悉く一揆根断に誅伐し加賀漸平定に逮び如ば柴田は毛受勝助家照をして江刃安土山の新城に遣し合戰のさ

ゆと注進して宗徒の首級ども實撿に入にき信長卿感悦斜めなを使者の毛受を御前に召され桐引両の御紋の付し御羽織をぞ下し賜はりる偖加州は佐久間に與ふべきゆ介の段は勝家の心に任さゞしと毛受へ直に仰せ度されつ早速御暇を給りて彼逆徒們の首級は悉く安土の松原にぞ梟されゝ○天正四年八月加賀國の一向宗門の郷民們蜂起して処々に砦を構へ同國大聖寺の城主戸次右近忠次と攻る縡しきゝ戸次よく防ぎ守ると雖も一揆方大勢にして容易征しがたく柴田勝家は北國藩鎮として越前北の庄の城に在が戸次は柴田へ援兵を乞ども勝家性質偏執深きゆへ戸次に功を立させじとて兎角に託せ援兵を出さゞ是に於て戸次信長公へ援兵を乞縡切之羽柴秀吉柴田が心念を察し密に信長公へ歎り奉り佐久間盛政を以て戸次と交代せめ給へと言上も信長その勸めに同し給ひ盛政に五千余騎の逞兵を与え大聖寺へ差向らる則ち盛政は勝家が甥なると以て柴田よく盛政に力と合し一手と成て忽ちに打平げ一國平均に及びなり是偏に秀吉が賢慮より出る処なるぞ

○小密荼勇戰織田勢と討崩も并重幸松永の胸中と謀る

根来の
小窓茶
勇戦の圖

根来小窓茶

天正四年冬十一月四日織田信長公上洛まゝ妙覺寺を以て旅館とし給ふ十三日正三位に昇進ありて同二十日内大臣に任ぜらる右近衛大將は元の如しと雖今月勢州前國司北畠具教入道滅亡及ぶ是は先達て内謀と企織田家に武德と偏勢なりて甲州の武田勝頼に一味し信長と山ぼうと謀られしより信長怒つて軍兵を差向今年冬十一月勢州三重の御所を害せる具教行年四十九歳嫡子左中將信意と云は信長の子息信雄の養父なり父子の義を以て命を助け京都に出て隱居せられ一樂庵入道と号す擾乱の中にその年も暮果て天正五年の春陽を迎へる信長卿は既に正月より亦もや攝州石山本願寺へ進發の風説有る処に紀

州雑賀郷に門徒一揆の蜂起せるゝ風聞しるれば信長卿之を聞しり召され前にも雑賀の一揆們の處爲に兵粮運送と偽謀を設け天王寺の陣を焼討し劃へ火蓄を放つて切し味方案外の敗走に及びしり其上紀州は未だ分國にて我領地に屬をにも非ず先南紀の門徒を打平げ續いて石山と攻亡ぼうと火急に御陣觸有て尒准備區々なり然る處に紀州雑賀の内三緘の者們根來寺の法師杉の坊等今般降參して安土に來り忠節勵むべき旨言上に及ぶ信長卿御容許有せられ降人們を先鋒に加え紀州表へ進發すべしと二月八日先上洛し給へり此時石山附城守衛の面々え信長別に令して曰く俺直ちに紀州へ兵押出さば信長數度の敗軍に物懲して石山我

脇と寄付ざるハ曾じ後と塞ぐると恐れて、附城の方へ夜討と懸て附城一箇所にても乗取時ハ信長紀州に長陣得せぞ摂州さて歸るハ必定と伏兵と配りて不意と討んと計較綷の鈴木重幸の方にも云ぞ介手段有にもあれ無にもあれ附城の面々安閑として打護り居も勇ふきに似う先んぞる則ハ人と征す石山今事兵粮ハ有はず軍に倦じて徒食ちきび先不意に此方より押寄て春の賸りと覚さ也者ハ介勝敗の注進に依て俺直ちに攝州表へ進發すべしと附城守衛の隊將分にハ佐久間右衛門尉信盛父子松永彈正少弼久秀同く右衛門佐久通蜂谷兵庫頭頼隆福富平左衛門正清武藤宗左衛門中條將監丹波右近們謹んて承り頓て城攻

の手配に逮びり其中にも松永彈正久秀へハ別に仰せ度さるる趣きはり久秀ハ元來土地案内の者ゑれば諸將に超る勲功立べきに然ハ久て聊の軍忠も者せぞ毎事敗走に逮ふ体爲く老將の頗る恥べき處と依て今般の合戦に於てハ廷弱の舉動有べくぞる条確与と覚悟すべき由命ド給ふ松永久秀謹んで承り大きに赤面して有ろ暗ハ心裡ハ顧ふ様ハ俺極意に深き慮り設るより故意と戰ひハ力と竭さぞ然るに信長氣利き大將ゑれば逸くも介氣色を察し此方の心腹と探ゑる處存ゑん今信長に昭まれてハ綷六ヶ敷今般の戰爭に烈しく働き暫く信長の狐疑と除ハんと総軍と俱ハ發向して諸將の隊伍に加らず一手の勢三千余人を以て徐

々石山の巽の城際ゟ進む尓餘の勢も思ひ〳〵に陣を取城際西南に列り備へ一同閧と合して舉うる這時石山本願寺にハ既に毛利より送る兵粮ゟ充勇氣凛然として手ぐを延引佛敵寄ゟバ微塵にせんと愈堅固に篭城ゟ居うる軍師重幸櫓に上りて城外の敵の陣隊を瞻め傍を顧て云る樣〳〵噫心憎き松永が隊樣哉渠今日の攻戰の働きに諸軍ゟ超る高名を顕さんとゝ事心脳に憤怒を含み進み向ふと覚えるぞ然も陣上に殺氣立昇りぬ味方無謀の軍仕懸る時ハ必ず敗軍に逮ぶべしとて紀州根來寺の僧徒ゟ小密茶とゝふ大剛の法師と志摩與四郎の兩個に何哉計策を稟し含め三千餘騎の逞兵を與へ南門の裡に隊を置せ合號を

看て切て出べしと命ず櫓々城門口の堅固を厚くし狹間々々に鳥銃を列べ敵兵來ると候懸たり時に織田方の總軍勢攻鼓を打て押來り再び閧を發すれば城中よりも閧を合せ互に矢軍とこそ始むる寄手の中より勇敢の兵士五六十人柵二重押破りつゝ石疊にはのぼり塀に取着り上らんとそ重幸指揮して左右の櫓より數挺の鳥銃を筒を揃て狙ひ撃に撃しむるに的とゞり矢庭十二三個撃倒ぬ是に壁易しく進み得ずると重幸ハ時こそ能れとて合号の旗を繽繽しれとゞ南大門を潤と押開き直先に根来の小密茶黒革威の具足を着し一大余りの樫の八角棒に鐵の輪を逼与入ると輕々と右手に引提げ左手にハ大長刀小脇ゟ搖こみ馬にも騎ず歩立にて

雨手遣ひ踊り出人馬を選まず當るを幸ひ或ひは中天に叩き上
横様に七八間も薙倒し猛虎の群羊を喰伏る如く一道の血路を開
きて瞬く間に死傷の敵兵二十五六個に逮び〻鬼の防主が出る
るぞよ近寄て打殺されふと敢て支へ双向ふ敵兵ゐ〻後に續いて志
摩與四郎一千余人の兵を引卒真一文字に松永が隊を目懸討て
かゝるぐき勢ひ〻〻如何仕ん猶豫つ馬を立て士卒を止まゝ
せ松永も勢を操出して對ひ戰へんと進みるが敵が半途に止まるを
看て是も亦漫に討て懸らず須臾白眼合て控つゝ然る程に小密
茶法師ハ千五百余の勢を前後に從え先佐久間が陣を一搦りふ打
崩し蜂谷武藤が隊に打入て散花微塵に擲き伏中条福富が隊

に蒐入七裂八裁に斬散し剛勇猛壯敵するものゐく昔の齊藤武藏
坊辨慶も談鬼坊主ゐい勝るべきと寄手の大軍動ひ慄き路七八
町程引退きゝ小密茶松永の隊を屹と瞻め暴に備へを左へ廻して
松永が備の横様より無二無三ふ込入討て懸るを志摩與四郎斯と看る
より同く閧を作て勢を動し松永が隊の正面に突入て指挾んで斬入
るけり雨敵挾めハ了得の松永是ハ滑りゝと思ひ〻ども日來の
老練少しも驚らず右五門佐久通が一手と以て志摩與四郎が勢と戰
へ〻久秀ハ八百余人の兵卒に鳥銃備へを付左右ふ從へ小密茶が
暴れ廻る前後より繕べ懸て霰の如く擊にさゝもの小密茶も擊
縮められ進む綽得ずして立るけり與四郎ハ久通と戰ひが與四郎ハ

偽り員て引退くと右衛門佐久通い道さ〻士卒に指揮して追行と松永是と看て呼留め久通敵に構へ謀計有ぞ猥りに逐ふて過失せそと大音發つて制し〻れ共若氣の逸る右衛門佐久道耳ふも入れず馳る程に松永が軍隊兩段に分れ備へ素氣て看へにる先に敗せし織田の軍將佐久間と始め蜂谷武藤が輩松永討ちふ續けやと佐久間い小密茶が後へ懸り蜂谷武藤い志摩與四郎の左方より拔列斬て〻り松永父子と援けて戰ふ這時城中より軍師の指揮とし鈴木孫市郎同一楠土橋平治神田土佐僧侶にハ楠正具入道定專坊願入寺本宗寺無量寺と始として究竟の勇將數十員二万余騎の大軍を引率し南門と東西の二門一時に開き大濤の激ちるが如く哄と喚いて討出づ志摩小密茶と前後左右より敵を捕んで突立〻れば寄手も新手の敵ふ打碎れ散々に亂れ敗北を松永久秀い一手の勢と圓形に備へ鳥銃の組手と四面八方に列へ近寄敵兵撃倒し〻れば雲霞の如き敵の中とも行向の途條開〻せて炮烟弛中と徐々と引取追討の敵も懸させざるい實も軍の場數に踏だる練功の業の古兵にはとと敵も味方も松永と稱歎ふし〻ね恁て石山方い思ふ儘に打勝長追無用と兵卒と纏め勝鬨三度擧て城に入ば勝軍の嘉宴と催ふされ上人自ら將卒に土器と賜ひ今に始め余忠勤と稱し深く戰勞と慰ら給ふ這時軍師重幸諸將に對ひ靜に譚して稟し〻るハ今日の戰ひ寄手敗走の中ゆも松永久秀の一

隊許りも進むも退くも皆法ゐり流石に老練姦雄の兵心憎き軍立と
者う俺倩向後の軍を慮るに敵の諸将僉松永が指揮を守り謀と
を構へて攻来らば頗る味方難儀に逮ぶべく暗に松永が形勢を視ゐ
に渠原来反覆不定の姦人にて首に三好義長を殺害し次ゐ将軍義
輝公を弑逆を今信長の幕下に屬ゆゑ雖ども渠れ素より五逆の罪
を犯せゝゆへ信長の鋒先に敵ゝぐく暫く織田に媚て降る而已始終
に長上の隙を窺ふ癖者へ這来信長を疎む氣色看ゆ依て渠當城
へ向ふ綽も出勢數度に逮びれども力と竭して戰ふ事多く今日適
々軍威を憑ゝ陣勢丈夫に持堅固むれども唯手勢の損亡多き況
要とゝ強て功を立んとの働きゆゑ是内心一物懐く證據なり吾ハ秘
み隱をと思へども腮に露顕譬への如し俺試みに久秀に書を贈つて
信長に叛うゝめて樂ゝまん是亦味方の一勝事へとて一書を認め雑
卒に命じ松永が陣所にぞ遣ゝる久秀其書を披き看れば

○今日織田の將士敗軍に及ぶの處足下其中に在て陣勢を張り
屈なる色なく實に當世の英雄奇術有と謂つべゝ信長原来
狐疑多く賢良を忌み謀臣を妬む足下遂に災ひを蒙るべゝ
惜い哉英雄にゝて大志をゝ足下若州群に據て自立せん綽と
得ば謹んで旗下に踞り一卒ゝん

天正五年春三月

松永彈正少弼殿　　鈴木源左衛門尉重幸

小谷の方三娘を連て
柴田ゝ再縁の圖

去る天正元年淺井備
前守長政没滅の後
小室小谷の方ハ息女
三娘と俱ゝ信長の舎弟
織田上野介信包の方ゝ
預り〳〵て五年寡居
〳〵て在〳〵るゞ柴田勝家の
妻室ハ織田の族臣飯尾近
江守直景の女子の処天正
四年十一月三日病死せ〳〵て
ゝより信長公の命として
佐々内藏助成政媒妁とあり

小谷ノ方

今年天正五年六月廿九日ゝ小谷
の方三娘と俱ゝ越前北の庄ゝ
入て勝家の後妻と成るゝ信長
よりハ津田左エ門佐長谷川藤兵
衛こまを送り佐々ゝりハ族
臣佐々權左エ門政祐飯田角兵
衛直景を以て供奉せしむ柴
田よりの迎ひとして安井左近
家清下枝新右エ門英定加藤
勘右エ門定德等参まり今年
小谷の方北一丈三娘の長女九才中
女七才小女五才あり
柴田修理進勝家四十五才なり
と云々

久秀讀牟つて歎息〳〵竟に反逆の臍を堅めて專ら尒時節を窺ひ
るにや尒年秋八月頃まで默止とり〻是重幸ゞ方寸の遠謀にて
松永の邪智と搦ちて反せ〳〵め倘信長と討亡をゝ到らゞ石山本願寺
に取ては幸甚〻〻亦松永ゞ滅亡ゝを則ち敵の手を以て敵を討を何
方にしても本願寺の至當の利方と思ひ〳〵ゞ一書を贈つて唆〳〵る
重幸實に無双の謀臣と謂べきなり

○信長紀州雑賀門徒一揆征伐并ひに秀吉石山勢と荒陵に挫く

織田内大臣平の信長公ハ石山表の勝敗注進いまゞ聞〳〵名給ゞる先
に紀伊國へ軍勢を發向ゞ給ふ斯と聽より門徒一揆們泉州貝塚
まで出張して城を構へ人數七百人許り楯籠りしに織田の先鋒堀久

太郎秀政疾貝塚へ押來ると告るゝも報恩に命撽んと歸命
無量の門徒の一揆も指揮もる本尊の大將無ゆ〻敵の旗色も看
ぞ尒夜船に乘紀伊國雑賀へ引退く堀秀政是と聞と均しく追討ら
けて數人と討取信長公物始めよりとて總軍に指揮して進ませ給ふ
堀久太郎一番に駈向ひ小雑賀口え人馬と入んとするに一揆們高き
岸の上より大木大石と轉〳〵落〳〵矢石と放ち支ゆゝ綽雨の如きに
近寄難く堀ゞ軍兵怪我人多く日前の宮まで退きつゝ暫く人馬扎
息と憩め猶豫るゝ偖濱手の方より向ふ人々には龍川左近將監一益惟
任日向守光秀惟任五郎左衛門長秀長岡兵部大輔藤孝筒井順
慶等三万余人谷川口より押寄ゞ一揆の者們長岡ゞ手へ弓鳥銃と

打放ちて數排ミ戰ひ〻〻ぐ長岡ヶ老等米田助右エ門有吉四郎右
衛門下津權内介藤本又右エ門あど場數功者の勇士の人々真先に
進んで鎗と揮ひ突立突伏無戰尽せバ一揆方終に討負て引退き同國
中野の城に入ほ〻堅く防戰の備へと設け再び討て出ぜ篭城を織田北
嫡男城介信忠諸軍と引て中野の城に押寄三日三夜息とも繼ぜ
矢玉と飛して攻詰々れば城中の一揆們殆ど勞れ果城と脱るもの半
に過殘兵い悉く城を開ひて降參を信長公本陣と近く移され雜賀
の城へと巻ょ せ給ふ諸大將部索と定めて三月朔日卯の刻より城際
へ押懸竹束と附井樓と上て城中と看透し是も昼夜三日攻詰け
れば一揆の輩防禦の術に盡松田源三大夫宮本兵大夫蘿木左エ門大

夫栗村治郎大夫岡崎三郎大夫等連署して信長へ降參と乞當
表一圓御宥恕下さらば後日石山御陣の節馳參粉骨して御味方在
まらんと一同歎願して誤り入ほど信長公竟に赦免と仰せ渡され三
月二十五日御陣拂ひ有て小烏若宮八幡へ御陣と移され堀久太郎
不破河内守九毛兵庫頭牧村長兵衛水野大膳亮生駒市左衛門
等に命じて根来口の在々所々と放火し一揆の者と探索し斬捨ら
れども杉の房へ豫てより神妙ふ味方ふ參りつりとて僅に根來社
寺領許りハ没收せられず附置給ふ同月廿八日津田太郎左衛門と泉
州佐野の城に留やれ紀刃の仕置ども仰せ含めれ自夫直ちに攝州
石山本願寺へ征伐有ぬき思し名の處勢刃前の國司北畠具教入

道去年十一月生害ほうる後譜代の家臣們密談して南都東門院の住職こる先に具教の舎弟の僧と掂こ談じて謀逆を勧め還俗せしめ北畠具親と名乗せつ數万の軍兵を驅集め勢刄森城を掂篭り勢ひ強大なりと注進有しかば信長公驚き給ひ集り勢も國司の旧臣謾つて大事に到ん先勢州の敵と征伐せんと三月二十九日江州安土の本城さして猛可に還陣ゆ給ひる斯て勢州進發御陣の評定諸將會議區々なる処紀刄雑賀表の一揆の残黨蜂起の門徒しづ〳〵ちよし追々安土へ注進有しかば天王寺の附城を尽り居る佐久間右兩尉信盛父子こ命し再び紀州表へ發向せしめ残黨悉く驅立らるゆ依之天王寺の砦に暫く佐久間信盛ゞ代として羽柴筑前守秀吉と以て當城の在番せしゆ給ふ偖て石山城中あい此風説を聞逮羽柴秀吉こそ望む敵こ先敗の恥辱と雪ぐんとて軍師重幸ゞ指揮も侯ぞに下間三位ゞ隊將とゆり西口半内大夫濵主計高松三之丞等と始め壯雄の者們六百余人四月五日黎明の刻より討立貝洞塚（古書の侭と記す貝洞塚旧地天王寺に有処と知られ疑らく茶白山の旧名あらん）の上に馬武者少々控へさせ塚の蔭ゆ鳥銃手練の兵凡五百人許り伏置て足輕と懸戰ひと催ゆ名秀吉軍立と省て伏兵と曉り中村式部阿閉萬五郎兩人ゆ命じて塚の上ゆる敵と討しゆ別に堀尾茂助ゆ鳥銃の組手と三百人と授け與へて計略と云含りて向こし三士（中村阿部堀尾）い各領承して打出しゞ這傍邊と深田多くして馬の進退自由に任せ難ど中村阿部い些も厭ずず一捲り

に塚の上へ駈登りて阿閉万五郎が手勢を引て塚の左を廻りて討て懸る豫て覚悟の縡に有ば石山勢が須臾支へて戰ひ〻合が伏兵れ鳥銃を等発〻撃崩さゞ〻と思ふ折柄堀尾茂助の三百人が塚の東方へ押廻りつゝ石山勢の伏る背よりつゞ懸て撃發ちれば豫ての軍略齟齬て撃殺せる〻もの數を知ず堀尾阿部中村の三士が一齊に関を作りて鎗先揃へ塚より北へ捲り落〻斬立薙立三町計り追捲れば茲にて討る〻者亦夥〻時に石山城中ゟ此縡聞え軍師重幸大ゟ駭き羽柴秀吉が尋常の敵に非ず無謀の戰ひせば必ず裏と搔き士卒を損ずる悔ゆるべ〻と鈴木孫市郎一楠ゟ二千余人の逞兵を援け下間三位以下の援兵〻て天王寺貝洞塚へ馳向ひ世猶心元なくや

思れん定専坊と志摩與四郎の兩個に二千餘人の兵卒を差添へ續いて味方と扶け出〻む此時羽柴勢の三勇士が逃る敵兵追討懸て勝に乗じて戰ふ處へ南無不可思議光如来と書〻白籏押立鈴木孫市郎が二千余人関と作つて打て懸り入交りて斬立る程ゟ双方死傷の者多く〻て一場の大合戰とぞ成〻る秀吉遼ゟ是と看て壯者們勝に侈り〻る深入の戰ひ〻て危ふれと淺野弥兵衛長政に命じて西方なる民家に幾所とゟく火と放つて焼立させられば折〻も西風彊く吹出〻て忽ち炎東へ蹇蹇黒煙大地に霧ひふさぎり兩軍の兵卒咫尺の間と辯せず秀吉指揮〻て烟の中より敵の中軍へ鳥銃夥〻く撃放さもにぞ勢ひ鋭き鈴木が軍兵も烟に咽て苦き中へ炮撃止度

打込れ的と成て死る者數を知ぞ乱れ騒ぎて悶擲る小間ふ中村阿閉堀尾は揚貝吹立兵卒を纏め脚を逸ぬ場所を退き領する処の附城へ引取城戸を固めて護衛なれば鈴木が軍兵狼狽の間ふ敵い如何と四方を省れば何時の間ふ金引退き煙りと共に立消る如く一同唇を開きて悶る計り六爲ん術も知らざり浩るとなれ石山の城中ゝは定専坊志摩與四郎の兩將軍勢卒して馳來るふ敵兵は早くも金引揚て對ふべき相敵一個もたく附城へ懸らんも今更て拍子抜且秀吉が軍畧に懸らば猶此上に大敗取んとて総勢引纏て無念と堪へ寥々石山へぞ引入る今日の戰ひふ秀吉が手へ討取首級數八十余當城番の物始ゝと勇み進まるふ無りる

○久秀叛して信貴城に捕籠る并に松永の人質を京洛に刑せ佐久間右衛門尉信盛同く甚九郎正勝の兩人は紀州雑賀の一揆退治と承り直ちに進發して合戰に逮び一揆の残黨悉く討平げ程なく凱陣して安土へ注進せ依て佐久間父子は元の如く天王寺の附城に在番し羽柴筑前守は交代して江州小谷へ歸城せられる偖御大將の信長公には軍事四方に打續けば先隣國より切鎮めんとて勢州北畠具親の逆徒們を急に押寄誅戮し給ひ勢州漸く平定に逮ぶ間もなく今年天正五年秋の半に到りて攝州石山へ發向ふまんと諸將の手當有る處石山附城の常番として摂州平野吾と警固させし松永彈正少弼久秀八月十七日夜ふ逮び屬城北

番役を引拂ひ和州多門山に少々番兵殘し置子息右孟門佐久
通同く大治郎永種入江大五郎政重岩成小治郎春之並びに岡周
防守吉市左近高山主殿頭菅田備前守が郎從其他大和河内攝
津紀伊の麾下の諸侍ひ馳加り騎兵三百餘人勢八千余人和州信
貴の山城に楯籠り近在の民屋を焼拂ひ信長公に對して逆籏を飜
えて筒井順慶より早騎を以て江州安土山本城へ注進あり其ころ
攝州在番の諸將よりも久秀謀叛の氣色注進せしかば信長公聞
し名て打笑給ひ予久秀が狼悪憎む雖も故意罪を宥めてゆる
し置君主を弑せし大罪の癖者反覆あさがば滅亡出來すば是則
ち渠奴が自然の悪業に惟ふに足利義輝滅亡してより既に今年十

三年忌に正當を逆謀起さい自滅の瑞相汝に出で汝に還る輪回
應報浮屠氏の諭しも誣べからず遮莫一応處存を尋めべしとて先
二位法印夕庵を御使ひして順慶より南都興福寺の成身院と副
使にし信貴山の居城へ遣はされて足下如何様の仔細有て恁籠城
の結構あ逮び候ふや存意白狀稟し上らるべしと云久秀兩使を厚
く饗應して後情發して兩使に曰く信長去つ頃諸將列席の中にて
久秀が君主を弑殺せし人に戰國の武士とは云ふ君父を殺さい稀
者なりとて嘲哢せられて赤面と搔俺一且の罪詞を慙愧の心より信
長に降りて軍忠を竭さば然らば俺に舊悪の條有とも織田家にて做
し過失るは人中にて面縛するふ逮ばぞ善悪誹謗ハ云さよ

松永怒て
信長の使
者を大ゐ
罵る圖
久秀

成身院
法印夕庵

人知べ〳〵悪人たり共織田幕下ゐれば君臣敬愛禮讓を施し非失有
とも擧ぎると君子と云ふ況て老壽と重り〳〵松永久秀小兒同樣ょ朝
哢と受て兩刀の手前も面目ゐ〳〵處存極めて敵となり篭城まれ
ば織田家ふ義理ふく恩もち〳〵信長自ら來て勝負ふせよ義輝此
如く暴殺ふして俱に家名と斷滅せ〳〵ん這旨信長へ達まべ〳〵と
て前に變つて言葉も荒く兩使と城外に追立出べ兩使い這々にて筒井へ歸
り翌日夕庵い安土へ引ゑ〳〵松永の返答逐一言上に及ぶ信長然こそ有
んと仰せられて去松永を誅伐せんとそ小谷の城主羽柴秀吉を召を
れ松永久秀謀叛と企て居城信貴の峯に楯籠る〳〵然有べ石山
を、押への城番向渠奴居ざる時い手薄に思る別所小寺兩將相望んで

天王寺と戍らん縡と乞と雖も諸代の侍大將等と閣き新參の與
力と受ん縡本意ふ〳〵ず其方天王寺へ罷り向ふべ〳〵松永退治討手
の役目ハ信長自ら發向せんと曰ふ秀吉畏りて稟しる樣い荒陵
へい唯今より馳向ひ堅固に戍り稟きべく候ふ併し我君直々の松
永御討手ハ余りと勿体なく社候ふ是い城介殿信忠の御出馬
あべ筒井順慶以下の國人と以て先鋒に進ませ討しめ給へ平日松
永筒井ハ不平の間ゆく叛逆再發の松永を悪みそ一入力と竭し
て働くべく候ふ時宜に依バ秀吉も馳向ひ稟すべく亦石山に篭る門
徒們い秀吉堅く押へと附ふべ城門より外へ首出を縡も成まじく御心
勞せ〳〵に逮ばざと諾潔く言上せ〳〵べ今に始めぬ秀吉ゞ忠言

信長卿御意麗〳〵同ド給ひ直ちに岐阜城え使節と立られ松永久秀討手の大將命ぜん信忠へ急の出陣促し給ふ借筒井へも先鋒の役と仰せ度され出勢準備と急がせ〳〵這序を以て信長公には羽柴筑前寺秀吉へ別段命ぐ給ひる樣ハ向後中國不伏の大小矣其方予に成代つて征伐せよ最も毛利三家の者足利義昭を楯とし〳〵本願寺と綽牒し合〳〵事攻上るべきの企有よ〳〵是亦尓儘棄置べきに非ず依て尓方へ播州一圓に與へん宜く防ぎと附て通路を止め國安民せしむべきと追々毛利征伐の汰汰に逮ん逆徒松永一族の落去次第天王寺城番い代らもべし尓方ハ播州へ下向せ〳〵勲功賞ぜし主君の釣命秀吉有難く御請禀し上小谷より手勢二千余人呼寄同弥

ん九月十七日安土を出馬し摂州天王寺へ〳〵進發せ〳〵然程に御大將信長公には松永が叛を悪ませ給ひ松水が人質に差出し置けるを躬兩個京地洛中洛外を引廻し謀叛人の看せしめの爲に首刎て梟木に肆まべしと御目代矢部善七郎福富平左衛門尉兩個に嚴く仰渡されバ無慙や松永が男子と云ハ十三と十一とに成るを佐久間與六郎が邸に預りると君命是非なく引出して京兆尹村井長門守が公衙に縄付すて召寄るが兩子共得も云ぬ美童にして梅花の霜と傷むの容儀長門守不覺に落涙と催し罪ふき童子も父の謀叛より死罪に行るん綽の不便なれ早々此處と脱走るして禁闕の裡に走り入て高貴の御方の愁訴と経て命乞と依願

ゆもせば倘や十死一生と得る便も有べし疾々去給へと進められば此男子等隨ふべく氣色ゐく父久秀謀叛を企て候ふ上は俺們が命は無縡にも父にも省斷て居候ふべくば譬へ命を赦さるゝとも逆人の躰們と謗られ向後何面目の候ふてや世の人と面を接せ稟すべき死もべき時ゐ死ざりせば死に増恥を受るとやや悪逆ゐ松永ゐ躰們未期に未練ハ起し候ハば早く婆婆の苦患を助け給ふゐ却て御慈悲に候とて些も驚へぞ稟しければ長門守深く感歎して實々看上る心操哉然れ父子一世の別れの際迫る最期の暇乞書とも認めや送り届け得きゐべしと料紙硯筥とも出與ふれば兄の童子頂戴きて稟しるゐ俺們の死刑知りつゝ謀叛伎倆ハ父子の愛着ハ逸斷て候ふ唯佐久間與六郎殿年來は懇情介抱有ゐく父に増りて憧らしく候ふと佐久間が方へ一通の禮狀を遺し其翌日兄弟兩個縄緘とゐり哀れや一輛車に打乗ら一條より六條まで引渡され七條河原にて搔下しつ長々しく西に向ひ合掌し念佛數篇唱ふる中に太刀取の獄卒背へ廻り敢ふく首を打落しゐり見物の貴賤面を霧ひて噫無慙や斯る愛也き少年を殺さゐ謀叛を企てゐとて爭て本意を遂べきやハ人も子ゐ有てもそ欲もはれ子を無して綷成就すればとて空に地獄の種造りゑ痴の松永の無分別や猾狡き老耄るれども大分縷ゐ戾つらおゝしの加減の算用違ひゑ僉松永とゐ嘲りにゐり